

(自由報告)

一、現代フランス農村社会学の動向

東北大学 田原音和

これまで、わが国の農村社会学界において、フランス農村社会学の動向が伝えられることは、比較的とぼしかったように思われる。これには種々の理由が考えられるが、フランスにおいて、農村社会学が一個の専門科学として確立されたのは第二次大戦後であったという事情も、そのひとつであろう。もちろん、社会学という分野にこだわらずに見れば、かつて西欧先進国中で最大の農業国と言われたこの国の農村と農業にかんする研究は、底深い伝統をもつていて。それは、マルク・ブロックの名著『フランス農村史の基本的性格』一冊をあげただけでも、首肯できるかと思う。しかし、それにしても、封建制から資本制への移行、工業による農業の駆逐という歴史的経験を、ほぼ共通にわかちもつているわが国とフランスとの間で、農村社会学にかんする研究交流がとぼしかつた事実は否めないところである。

この報告では、フランスでは最大の、そして最も有力な農村社会学者の研究集団であるパリ第十大学（ナンテール）の「農村社会学集団」——仮に「ナンテール学派」と呼んでおきたい——の創設から現在にいたるまでの研究課程を追いかながら、主としてフランス農村社会学の理論的課題の変遷と現状を述べ、ささやかな研究交流の緒口としたい。この学派の性格と研究の現状の概要については、すでに私は昨年度の東北社会科学において簡単な報告をし、その後、文献の整理を試みながら、こ

の学派のいわば研究史をやや詳細に『村落社会研究・第十三集』に述べておいた。今回は、それらを踏まえて、この学派の対照的な一人のリーダーであるアンリ・マンドラーとマルセル・ジョリヴェの理論的な対立点を浮き彫りにしながら、フランス農村社会学の当面する理論的課題をひきだしてみたいと思う。

ご参考までに、この「農村社会学集団」の横顔を素描しておくと、現在、国立科学研究センターの正規の登録集団であって、その主任研究員（兼ナンテールの社会学教授）マンドラーのとともに、総勢二五名の成員を擁し、活潑な調査研究活動をおこなっている。もともと、この集団はアンリ・ルフェーヴルによって一九五〇年に創設されたものであるが、当初は、当時の「リュラリスト」たち（農業経済学、人文地理学、社会経済史、農業政策、民族学などの専門家あるいはそのいずれにも分類しがたい研究者）を集めて開かれた定期的な研究集会であった。そのころ若手であったマンドラーたちがそこから巣立つていった経緯からすると、その創始期はわが「村研」に似たものがある。体制的問題状況もまた彼我ともに共通したものがあつたからであるう。

そこから巣立つた若手研究者がやがて農村社会学のスペシャリストとして結集し、農村社会を方法的に調査する研究集団として脱皮していく。そして国立政治学協会や国立農学研究所の研究者たちとの共同研究を推進して、一九六一年からは「フランス農村社会における社会変動の比較分析」という主題のもとに全農村社会の総体的把握を目指す共同研究を大規模に展開する。ついで、一九六八年の「五月運動」の結果、新設されたパリ第十大学に本拠を移して、やがて農村社会学の研究者養成のためのメッカとなる。

右の調査結果は、主に叢書『フランス農村社会』（全三巻）にまとめられているが、その調査はいまもなお続行されていると言つてよい。し

かし、この研究過程で、マンドラー（一九一七年――）よりもやや若い若手のマルクス主義者ジョリヴェ（一九三四年――）たちの登場によって、フランス全農村の類型化による社会学的比較のための理論にかかる集団内部の論争が活発になり、農村社会理論の包括的な再検討を開始して、きわめて活気に満ちた研究状況を呈している。これもまた、わが「村研」に似ていると言えなくはない。

こうした論争の最近の状況を通して、フランス農村社会学の理論的課題を、わが国のそれと対比してみると資することができれば幸いである。